

2018年度入学式 式辞

ことのほか寒かった今年の冬も去り、桜前線がゆりが丘の上に立つ尚綱の学び舎を訪れる日ももう間近となりました。

本日、尚綱学院大学、大学院の入学式を迎えられた皆さん、まことにおめでとうございます。心よりお祝いを申し上げ、歓迎をいたします。

またそれぞれの若い歩みを見守り、自分のこと以上にその幸せを願い、大切に支え導いてこられた、保護者、ご家族の皆様におかれましても、今日までの長い道のりを振り返れば、言葉では言い尽くせぬ感慨があらたきことと拝察申し上げます。心からお喜びを申し上げます。

皆さんの中には、これまでにオープン・キャンパスやプレ・エントランスデーの企画に参加して、これからの学びについておよそのイメージを持っているという人や、友達になれそうな人が見つかった、という人もいますが、これから始まる新しい生活に、大きな夢と希望と同時に、一抹の不安を抱えているという皆さんもまた多いことだろうと思います。

2週間ほど前、この同じ会場で、皆さんの4年先輩に当たる、2017年度の卒業生に対する学位記授与式が行われました。その時に卒業生代表として式辞を述べた学生は、尚綱学院大学でかけがえない友人と出会えた、4年前尚綱を選んだ自分の決断は正しかったと述べていました。しかし、この学生も、彼自身の言葉によれば、入学した当時は、人前に出ることや、積極的に人と関わるのが苦手だったそうです。オリエンテーションの時に、勇気を出して声を掛けたことがきっかけで気の合う友人ができ、その友人を通して輪が徐々に広がっていき、やがてその仲間と映画研究会を立ち上げることになり、さらに信頼関係が深まっていったと述べていました。

互いに心から尊敬し、生涯信頼し、支え合える友人を見つけるということは、そう簡単なことではありません。しかし、それも最初はほんの小さな一歩を踏み出すところから始まります。皆さんも、どうぞその一歩を踏み出してください。急ぐことはありません。じっくりと時間をかけて育てていけばいいのです。

さて、尚綱学院は、明治25年に、米国から派遣された宣教師によって設立されて以来、今年126周年を迎える、伝統のある学校です。尚綱とは、綱を尚えると読みます。中国の古典にある「衣錦尚綱」（錦を衣て綱を尚う）という言葉から採られたものです。内には錦を着て、つまり人間の内面を磨いて、しかしそれを綱、つまり薄い衣で包んでひけらかさない、そういう謙虚な生き方の大切さを述べたものです。

しかし、単に謙虚であるということだけを言っているわけではありません。「衣錦尚綱」に続けてこの『中庸』という書物は、「君子の道は闇然として日々に章かなり」と述べています。つまり、立派な人間というのは、一見したところその立派さがよくわからないけれども、やがて人々に明らかに知られるようになる、ということです。それは、既存の価値観やその時々の見かけの評価にとらわれず、見えないものに価値を置き、全ての隣人と共に歩もうとする、キリスト教の自由な精神に通じるものでもあります。

本学は、そのようなキリスト教の精神を土台として、自らを磨き、他者と共に生きることを志す、そういう人間の育成を建学の精神とし、永い伝統に根差すと同時に、2003年に、男女共学の4年

制大学として新しくスタートした、若い大学でもあります。皆さんはその第16期生ということになります。皆さんは、今日から始まる大学での生活に何を期待しているのでしょうか。

本学は、1学部6学科、幅の広い分野を一つのキャンパスで展開しています。学生数約2,000人というのは、日本の大学としてはほぼ中くらいの規模ですが、学生や教職員の距離感が身近で親しみやすく、キャンパスも豊かな自然に囲まれ、ゆとりのある環境に恵まれています。そんな恵まれた環境の中で、皆さんの前には、たくさんの可能性が広がっています。正課の学びを通じて幅広い教養と専門的な知識や方法論を身に付けることはもちろんですが、学生会所属の文化系、音楽系のグループや聖歌隊、体育会系の部活やサークルもあります。ボランティア活動や学外の団体に所属して活躍している学生もいます。いろいろなアルバイトをやってみたいという学生も多いでしょう。しかし、これらすべてのことは、一つの目標につながっています。それは、皆さんがこれからの時代を生き抜いていく本当の意味での実力を身に付けるということです。

今、世界中でいわゆる第4次産業革命が急速に進みつつあります。そこでは、従来人間が扱ってきた仕事の多くをAI（人工知能）を搭載したロボットが担うようになり、最先端技術を活用した製造業だけでなく、医療や福祉をはじめ身近なサービスや一般事務の世界まで、職業構造も大きく変化するといわれています。そうなれば、当然私たちが必要とする能力も大きく変わってきます。皆さんは、これからその大きな変化の時代を生き抜いていかなければなりません。

そのために尚絅学院大学として大切にしたいことが3つあります。その第一は、志を持つということです。尚絅学院の初代校長のアニー・ブゼルは、金持ちになることや有名な人になることも大切だけれど、たとえ世の中の目立たない片隅で働いていようとも、一人一人が良い志、彼女はそれをGoodnessと表現していますが、そのGoodnessを持つことによってこの世の中が良くなるのだ、と述べています。皆さんは、それぞれこの世の中を今より少しでも良くしたい、そのために自分のできることをしたいという願いを持っていると思います。その思いを大切にすることです。

二つ目は、その思いを行動に移すことです。ある実業家の言葉を借りれば、「自分のいる箱から出ようとする」ということです。最初は小さな一歩でいいのです。小さな成功体験を積み重ねることで、自分の中に自信を育てていくことです。

もちろん、箱から出てチャレンジしようとするれば失敗もするでしょう。しかし、箱の中に安住してしまえば、成長はありません。もちろん、失敗すれば、失敗したという事実を変えることはできません。しかし、その意味を変えることはできます。取り返しのつかない過去ではなく、同じ過ちは繰り返さない、という教訓、そしてそれによってさらに成長した自分の、次なる挑戦へのエネルギーに変えることはできます。

そして3つ目は、つながりを大切にすることです。先に述べたように、尚絅学院は「他者とともに生きる」ということを建学の精神としています。最初に紹介した学生のように、最初のごく身近な人、自分の隣にいる人、目の前にいる人とつながることです。そうすれば、そこから一つ一つ輪が広がっていきます。どのようにして誰とつながっていくのか、そこから何が生まれるのか、それはわかりません。しかし、独りではできなかったに違いない何かが、そのつながりの中から生まれてくることは間違いありません。

皆さんが活躍することになるこれからの新しい時代に大切なことは、学んだ知識の量ではなく、その知識をどう使うか、そして何を実現するのかということです。そこでは、これまでの社会システ

ムを前提とした偏差値や学校歴は通用しないのです。尚絅学院大学では、これらの3つのことを大切にしながら、皆さんが新しい時代の要請に応える実力を身に付け、それぞれの未来を切り拓いていくために必要な、たくさんの学びと出会いの場を用意しています。その中から、皆さん一人一人が、自分が生涯をかけて打ち込める何か、自分はこれを通じて、これを力に、これからの時代に貢献していく、いわば自分自身に与えられたミッションを見つけていってください。

これから始まる学生生活が、希望に満ちた、充実したものとなるように、皆さんがまっさらなノートの上に今日からつづる一つ一つの物語の上に、神の豊かな祝福を心から祈り、2018年度入学式の式辞といたします。

2018年4月4日

尚絅学院大学学長 合田隆史